



## 田園都市とエコタウン構想

東日本大震災被災地の復興計画が動き出そうとしている。「エコタウンをつくり、福祉都市としての性格も持たせる」（菅首相、4月1日）、「ドイツの田園都市などをモデルにする」（松本内閣官房参与、13日）のように、『エコタウン』がひとつのキーワードとなりそうだ。

しかしながら、エコタウンと言われても一般市民には漠然としたイメージしか浮かばない。またドイツの田園都市とはいったいどのようなものなのか。日本の田園都市とは似て非なるものだけに説明が必要だ。

今回、環境建築のパイオニアでありエコ住宅地の設計を手がける、シュトゥットガルト工科大学建築学部長アンドレアス・ルフラー教授（Prof. ANDREAS LÖFFLER）にエコタウンの基本的な考え方をうかがった。

日本語の『田園都市』は19世紀末にイギリスで生まれたガーデン・シティーの訳だ。ドイツ語ならガルテン・シュタットとなり、ドイツで一番最初（1907年）に作られたものがたまたま私の住むカールスルーエ市にある。

「工業化による環境悪化や貧困拡大の反省から『住居・仕事・余暇が調和したまちの建設』が目指されました。労働者の家庭を主な対象とし、小さな住宅の裏畑で野菜や果物を育てることができると教授。

ガルテン・シュタットは賃貸が基本で非営利の住宅組合が運営している。入居希望者はたいへん多く、2世代、3世代と住み続ける家族が多い。魅力的なコミュニティーが維持されている証左だろう。自然共生と自律を重んじるガルテン・シュタットの理念は建設から100年を経た今も脈々と受け継がれている。

エコタウンの源流となるのはこのガルテン・シュタットだけではない。エコタウンの他の基本条件『コンパクトな建築による省資源化』『土地の有効利用』『ある程度の人口密度』などは、アパートやマンションが立ち並ぶモダンなニュータウンを参考にしているという。

例えば、いくら自然が豊かでも巨大な敷地を野放図に占有するまちはエコタウンと呼べない。徒歩や自転車です日常生活を送れるコンパクト

なまちがエコタウンのひとつの理想とされる。

このことは人口密度とも関連があり、公共交通を効率よく運用するため、あるいは公共施設を最適配置するためにも、ある程度の人口密度が必要だ。もう一点付け加えると、都会にほど近く公共交通でアクセスできる利便性も大切になる。都会のデパートや劇場へ行くのに自家用車で1時間以上かかるようなまちも、エコタウンの範疇に入らない。

「エコタウンの最上位にくる概念は持続可能性です。その下にエコロジカルな視点、自然、再生可能エネルギー、公共空間、自家用車が少なく便利な公共交通、良質のコミュニティー、余暇空間といった要素が並びます。日本ならばここに地震対策が加わるでしょう。（エコタウンに限らず）単なる住宅地を作るのではなく、一通りの都市機能がそろった小さなまちを作る考え方を『ズィードルングスバウ』といいます。これはドイツで発展したものです。

最後に、学生や研究者の交流を通じて日本と接点を持つルフラー教授から被災地へメッセージをいただいた。「よりよい未来を信じ、持続可能性を求める勇気を持って欲しい」。伝統を活かす勇気、新たなものを取り入れる勇気、柔軟さを保つ勇気、障害を乗り越える勇気。教授が伝えたい言葉の意味を、私はそう理解した。

（在独ジャーナリスト 松田 雅央）



見学者に自ら設計したゲロルズエッカー・エコ住宅地を説明するルフラー教授